

日本吳音の非体系的特質に就いて

— 止攝を中心として —

金正彬*

目次

1. はじめに
 2. 分韻表
 3. 分析
 4. まとめ
-

1. はじめに

「吳音」は、歴史的に「和音」「對馬音」に対する別称¹⁾であった。しかし、安然の「悉曇藏」(880年成)にあるような音韻の類似性²⁾、或いは、「凶書寮本類聚名義抄」の和音・吳音の非弁別的意識³⁾のため、後代に皆、「吳音」と通称され、漢音系字音に対する通念として現代に至ったと考えられるものである。よって、本稿で述べる「日本吳音」は正音(漢音)に対する古態概念に従う。

止攝諸字の日本吳音は、概ね上古時代の歌部(a)、微部(哈韻などa、微韻ə)、之韻(之韻、尤韻などə)、佳部(支韻e)、脂部(脂韻e)との関係がある⁴⁾。また、止攝一部字は侯部(u)、幽部(o)、祭部(a)との関係があり、更に、日本上代特殊仮名遣いのエ列乙類字、蟹攝のエ列乙類字とも深く関わっているため、単純には言い切れない点が多い。

この止攝諸字に於ける日本吳音史的資料は、推古遺文、古事記、万葉集、日本書紀α群・β群などの日本古書によく現れている。また、平安時代以後の「九條本法華経」「安田八幡宮藏大般若波羅蜜多経」「觀智院本類聚名義抄和音」「大般若経音義」などにも先代の日本吳音史的資料が現れている。しかし、上記の漢語史的理由、祖系音に関連する時代性・方言性、受け入れ母体の受容態度に関わる重層性などが複雑に絡み合っているため、日本吳音の体系に於ける究明は、一つの課題⁵⁾として残されている。

研究対象として平安時代以後の日本吳音資料「觀智院本類聚名義抄和音」⁶⁾、「安田八幡宮藏大般若波

* 한말대 학교 강사 일본어 교육

1) 馬淵和夫(1984)『日本韻學史の研究』臨川書店 pp.1054-1076

2) 「…吳似和音 漢如正音…」のような「吳音」「漢音」と言う述語が見られる。

3) 沼本克明博士(1982)は『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就いての研究』(pp.157-232)で、兩者の差異は体系の相違でなく、大般若経讀誦の個別的讀み方に過ぎないであろうとされた。

4) 宋代鄭庠は6部、吳棫は9部を始め、近代B. Karlgrenは26部、董同龢は22部、王力は29部などがあるが、ここでは董同龢の研究を参照する。

5) 沼本克明(1997)『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院 p.213

羅蜜多經⁷⁾(以下、「安田本」)、「大般若經音義」⁸⁾無窮會藏本、藥師寺藏本(甲本、乙本、丙本、丁本)、天理本第一帖、天理本第二帖、天理本第三帖を主資料として採用し、上古音資料として沼本克明博士の「上代の漢字音」分韻表⁹⁾を援用し、日本漢音資料としては『長承本蒙求』¹⁰⁾『佛母大孔雀明王経』を参照、援用する。

平安時代以後の日本吳音資料には、漢音も多く混在しているため、聲点によって取り除く作業を行い、廣韻206韻順による総合分韻表で示す。廢韻乙合字に「癩ハイ4h,5t,25t,34c,35a,36t,41c,52f,65s」「吠ベイ10t,26j,31c,35f,35o,38r,42c,44e,45i」(数字は頁、英字は行)が「安田本」に見られるが上代日本吳音資料に比較分析すべき対象字音が見当たらないため、省略したい。

2. 分韻表

平安時代以前の上代日本吳音は、古層の推古遺文、中層の古事記、新層の日本書紀α群、β群の三資料四群¹¹⁾で、平安時代以後の日本吳音点は「日本吳音資料」として總括的に示す。字音点は片仮名で示すが、上代特殊仮名遣いの甲乙區別がある場合には片仮名は甲、平仮名は乙類を表す。

なお、点線は漢語史による古い音形と思われるものを左から順に示し、上聲字・去聲字は平聲字で代表する。

2-1. 支韻三等乙

上古	歌部a、支部e		
中古音	-iie		-i ^w ie
推古遺文	奇カ宜ガ	義げ	
古事記		宜げ	
日本書紀β群		被ひ	委キ
日本書紀α群		蟻ギ彼ひ	爲キ
日本吳音資料	糜ミ靡ミ／ヒ池チ 奇・綺・寄キ宜・儀・伎ギ 差・支・枝・氏・翅・蛉シ 施 シ／セ兒・爾ニ 璃・詈リ		吹・垂スイ 委キ 詭・毀クキ 累ルイ 僞グキ 瑞ズイ

2-2. 脂韻三等乙

6) 沼本克明(1995)『日本漢字音史論輯』築島裕編 1995 汲古書院 pp.125-186

7) 東辻保和(1971)『訓点語と訓点資料第44輯』訓点語學會

8) 築島裕(1983)『大般若經音義の研究』勉誠社

9) 沼本克明(1986)『日本漢字音の歴史』東京堂出版 pp.68-80

10) 沼本克明(1997) 前掲書 pp.278-347

11) 概ね、沼本克明博士の分韻表によって示す。前掲書(1986) pp.58-59 参照。

上古	脂部ie	
中古音	-iia	-i ^w ia
推古遺文		
古事記	師シ美ミ備び	
日本書紀β群	湄ミ備び媚び	位キ
日本書紀α群	美ミ悲ひ	
日本吳音資料	眉・魅・美ミ 嚮ヒ備ビ 遲・稚・致・緻チ 尼・膩ニ飢ケ 耆・呬キ師ソツノシ 鷄・指・旨・尿・尸・屍「シ」梨・履・利リ	龜キ 軌・匱クキ 墜 ツイ 愧クワイ 涙ルイ

2-3. 之韻三等乙

上古	之部ə	
中古音	-iib	-i ^w ib
推古遺文	意オ己コ	
古事記	意オ其ご基ご	紀き疑ぎ士ジ
日本書紀β群		紀き疑ぎ擬ぎ士ジ
日本書紀α群		己き其き紀き疑ぎ擬ぎ
日本吳音資料	欺コ 期ゴ 己コ	癡・持・置チ 旗・憲・喜・熙キ 疑・擬ギ 醫エイノイ咫 イ 侍・侍ジ 士・嗤・止・齒・市・熾・嗤・試・幟シ 俚・吏リ

2-4. 微韻三等乙

上古	微部 <i>əi</i>		
中古音	<i>-iəi</i>		<i>-i^wəi</i>
推古遺文	氣け希け		鬼き歸き非ひ未み韋キ
古事記	氣け	幾き	貴き斐ひ肥ひ味み微み韋キ
日本書紀β群	氣け	氣き幾き機き	未み微み韋キ謂キ
日本書紀α群			微み偉キ威キ謂キ
日本吳音資料		譏・機・蟻キ	飛・匪・費ヒ微ミ 威・小韋・圍・慰・胃キ 暉貴クキ魏グキ

2-5. 支韻三等甲

上古	歌部 <i>a</i> 、支部 <i>e</i>			
中古音	<i>-ie</i>			<i>-i^wie</i>
推古遺文	侈夕移ヤ	俾へ	知チ智チ爾ニ彌ミ支キ 岐キ斯シ	
古事記		是ゼ	伎キ岐キ岐ギ紫シ斯シ 知チ智チ邇ニ爾ニ卑ヒ 彌ミ	
日本書紀β群			易イ岐キ祇キ企キ斯シ 知チ智チ池チ爾ニ邇ニ 卑ヒ避ヒ彌ミ離リ	
日本書紀α群			岐キ企キ施シ斯シ知チ 智チ爾ニ避ヒ彌ミ	
日本吳音資料			脾ヒ易・迤・移イ 紫・皆・刺・賜シ	規キ髓ズイ恚イ

2-6. 脂韻三等甲

上古	脂部ie		
中古音	-ii _a		-i ^w i _a
推古遺文	尼ネ	伊イ夷イ自ジ至チ遅チ 比ヒ利リ	葵ヌ
古事記	尼ネ禰ケ	伊イ棄キ自ジ遅チ地チ 比ヒ	
日本書紀β群	尼ネ禰ケ	伊イ耆キ資シ致チ比ヒ 利リ梨リ寐ヒ	
日本書紀α群		伊イ耆キ尸シ指シ矢シ 旨シ致チ遅チ尼ニ比ヒ 利リ梨リ寐ヒ寐ミ	
日本吳音資料		毘・髀ヒ寐ミ／ヒ 諂・資・恣シ 伊・洩イ棄キ	維・遺ユイ 揆クキ／キ 翠・頼・遂スイ

2-7. 之韻三等甲

上古	之部ə		
中古音	-ii _β		-i ^w i _β
推古遺文	止と已よ里ろ		
古事記		志シ治チ理リ	
日本書紀β群		以イ異イ之シ芝シ志シ辭シ 始シ詩シ餌シ理リ	
日本書紀α群		以イ之シ志シ思シ辭シ司シ 伺シ始シ耳シ詩シ餌シ理リ	
日本吳音資料		滋・祀・伺シ 怡イ	

3. 分析

3-1. 支韻

上古支韻に就いての先學の見解は、概ね、歌部aと支部eに属している。この歌部aは、中古に入ってから介母jの影響を受けてe¹²)に近くなり、従って、支部eとの合流的事象は自然と行われたことが想定される。これは中古に入って更にieとなったことに就いて、陳澧、黄侃、B. Karlgren、周祖謨、林尹、王力、陸志韋、李榮、董同龢、周法高など¹³⁾は意見を同じくしている。

12) 董同龢(2002)『漢語音韻學』文史哲出版社 pp.279-280

このような漢語史的研究結果に基づいて纏めてみると、a>e>ie>iとなり、推古遺文a音形、古事記e音形、日本書紀の音形（a・β群を問わず）として、正に日本側の上代万葉仮名研究諸家によって明らかにされている日本吳音の古・中・新層の三層論を傍証しているわけである。しかし、e音形は上代特殊仮名遣いのエ段乙類字に屬し、次代のi音形とは体系を異にすると考えられるものである。これは蟹攝の日本吳音点からも確認できるもので、これに就いて沼本克明博士は「本來外來語音であったという正にその理由によって」¹⁴⁾日本語の音韻体系から免れて伝承されてきたとされたことがある。

これは、開音節構造¹⁵⁾の上代日本語（或いは、日本吳音）資料に、二重母音の蟹攝エ段乙類字がai音形に連続しないことと言えるし、また、日本語としての普遍的音韻変化（ai>エ段乙類）と無関係であることで裏付けられる。

以下は、蟹攝字で通時的に現れる日本吳音を管見で示す。

哈韻	倍	ベ>バイ	開	ケ>カイ	該	ケ>ガイ	凱	ケ>カイ
灰韻	妹	メ>マイ	梅	メ>マイ				
	每	メ>マイ						
泰韻	味	メ>マイ						
皆韻	階	ケ>カイ						
佳韻	賣	メ>バイ						
祭韻	勢	セ>セイ	幣	ヘ>ヘイ				
	制	セ>セイ						
齊韻	米	メ>マイ	迷	メ>マイ				

更に万葉仮名から見られる上古日本（複合）語の例¹⁶⁾を挙げる。

「和芸幣」（我之家、古事記中卷）→「和賀意富岐美」（同中卷）＋「伊幣」（同下卷）

「多氣知」（高市、古事記下卷）→「多加」（高、同上卷）＋「伊知」（市、同下卷）

「芸」「氣」は何れもエ列乙類字で、後の漢音形「ゲイ」「キ」と不連続音となり、「氣」は止攝字に屬するものである。このような蟹攝字に於ける上代日本吳音に連続しない音韻体系からみると、支韻e音形も次代のi音形と不連続音となるわけである。ただ、蟹攝字と止攝字には、通時と共時と言う相反する非体系的歴史性が見られる。

森博達氏の日本書紀α群、β群は、体系の相違によるものである¹⁷⁾。原音によるα群、に對するβ群は当然、日本吳音が根幹を成すわけであろうが、上記のように日本吳音β群にも音韻体系を異にするものがあるため、更に區別する必要がある。便宜上、後代に連続する日本吳音はβa類、これに對して普遍的な日本語の音韻変化から免れた上代特殊仮名遣い諸字、或いは後代に連続しない日本吳音形は

13) 陳新雄(2000)『重校増訂音略証補』文史哲出版社 p.161

14) 沼本克明(1997) 前掲書 p.208

15) 有坂秀世(1955)『上代音韻攷』三省堂 p.66

16) 有坂秀世(1955) 前掲書 pp.719-720

17) 森博達「漢字音より觀た上代日本語の母音組織」『國語學 120集』(1981) pp.30-42

「平山久雄氏に答え再び日本書紀α群原音依據説を論証す」『國語學 131』(1982) pp.55-66

βb類と名付けたい。この日本吳音βa類、βb類は、更に古層、中層、新層に分けられるため、日本吳音の体系と音韻史的説明に有益であろう。

平安時代以後の「觀智院本類聚名義抄和音」「九條本法華經」「安田本」「大般若經音義」などにある支韻字日本吳音は、概ね、先代の日本吳音βa類の新層 (i 音形) に連続したものとして解釋できる。支韻三等乙審母「施セ」は日本吳音βb類の中層に對應するものとして、異音韻体系のβa類との共時的實態を成している。支韻合口字は、日本語音韻体系によって取捨選擇が行われたため、中心母音のみを對象にすると、大体、日本吳音βa類と看做せる。また、支韻乙合口字は、殆どβa類の新層に對應し、中心母音のみを對象にすると日本吳音開口字βb類の中層 (e 音) に對應するものもあれば、「劑」(支韻甲精母)のように日本吳音開口字βb類の古層 (a 音形) に對應するものもある。

齒音に於ける韓國漢字音o音形は、現在、韓國側ではその推定音をo、ʌ、aとして¹⁸⁾定まっていな
い(便宜上、oにする)が、いずれにしてもi音形にはなり難いもので詳しくは3-3.之韻で後述したい。
『出雲風土記』の「奴奈太波比賣」(沼河比賣)、『欽明紀』の「彌太家」(官家)などの支韻字はa音形であ
り、何れも上古音として認められるもの¹⁹⁾である。

3-2. 脂韻

上古脂韻に就いて、B. Karlgren、王力、董同龢などの上古音研究諸家は、脂部(一部合口は之部
i^wə) ieにしており、中古音として概ね、iとしていることにも意見を同じくしている²⁰⁾。これに基づ
くと、ie>iのような漢語史的沿革が想定される。これは、推古遺文、古事記、日本書紀β群に見られ
るe音形と日本書紀α群に見られるi音形で傍証されるものである。

脂韻乙見母「飢ケ」、脂韻三等甲の古層、中層にe音形が混在しており、皆、βb類音の古層、中層に
屬する。e音形以外のi音形は三層にわたって現れているが、漢音と連続するものであるから、それぞ
れβa類と看做せるがこの場合のβa類音は古層、中層、新層に亘って現れる。つまり、βa類音と言っ
ても韻目によってβb類音の古層に等しい字音事象が存在するわけである。

一方、韓國漢字音も、概ねβa類に對應し、更に古・中・新層音形に對應する。二等字一部、三等甲
字全体の齒音字にo音形がある。このうち、二等の「師・獅・篩 (so)」の場合には「市」の類推音とし
て、それぞれ解釋できであろうが、脂韻甲の「私、死、四」(so)は注目すべきものである。

脂韻と支・之韻とは上古時代には厳格な區別があり、四世紀以降、次第に脂・之韻の合流があっ
た。また、南北朝詩人の韻文には、脂・微韻との同用押韻と6世紀以後の微韻の獨用、そして上古の
歌・脂・微部の三部に共通点が存在した²¹⁾、これらの点に於いて韓國側の齒音oはβb類の古層、中層
に對應する可能性があるが、日本吳音の脂韻にはこれに對應するa、o音形が無いため、論外とする。

3-3. 之韻

上古之韻は之部に屬し、董同龢、王力などの上古音研究諸家は、その推定音として魚部a、侯韻oと
關係があるəであることに、別段、異見が無いようである。推古遺文、古事記に現れるオ列甲乙はこ

18) 박창원(2000) 『口訣研究6』口訣學會 pp.174-175

19) 滿田新造(1964) 『中國音韻史研究』p.631

20) 陳新雄(2000) 『重校增訂音略証補』文史哲出版社 p.16

21) 王力(1980) 『漢語史稿』中華書局 p.83

の漢語史的背景を傍証したものであろう。このo音形はβb類の古層に属する。

また、之韻は中古(4世紀)に入って脂韻と合流し、そのために古事記以来の日本吳音から見られるi音形は、平安時代以後の日本吳音資料、後代の漢音資料『長承本蒙求』『佛母大孔雀明王經』などに連続するため、βa類音として看做せる。この場合のβa類音はβb類音の中層、新層と共時的實態を成し、時代的に違いは無い。つまり、我々が認識している平安時代前後の日本吳音資料には、βa類音とβb類音との二音韻体系、更に古層、中層、新層と言う時差的音韻が共時的に現れているのである。

韓國漢字音も、概ねβa類音のi音形が主を成している。之韻一部の齒音二等字と三等甲字にo音形が現れるが、これに就いて、有坂秀世博士は「土仕史使事師などのsǎなどの形は、恐らくshih, zhihの形を模倣したものではなかろうか」と言い、判断に慎重な態度を見せたが、次いで支韻「兒no」を含め、「何れも、やや後世の支那音の特色を示しているものである」²²⁾として10世紀ごろの開封音に基礎を置いた字音体系であると明言したことがある。勿論、この南宋開封音母胎説は、後、河野六郎博士によって修正されたが、o音形に就いての見解²³⁾は、大同小異である。

しかし、上古詩賦の用韻法に之韻哈韻の二韻同用に關することは、嘗て満田新造博士が論じた²⁴⁾通りであり、6世紀以後の微部微韻の獨用化とともに中古に入って哈韻と分化したものである。また、上古のa音は元音高舌化²⁵⁾に伴ってa>a>oという漢語史における普遍的变化、或いは、上古詩賦の押韻法上、之韻哈韻との合用事象²⁶⁾、そして、以下²⁷⁾のような日本の古文獻に現れる古層o音形は、韓國漢字音のo音形に對應するものであると考えられる。

之韻	「和賀太富岐美能」(我が大君の) 「仁徳記」
	「船太具如久」(船漕ぐ如く) 「万葉集九」
	「葛木当麻倉首女比太古」(廣子) 「法王帝説」
哈韻	「陞爾幡譽辰太母」(辺には寄れども) . . . 「神代記」
	「安之比奇太山太」(足引きの山の) 「万葉集十九」
	「多磨太彌素磨屢太」(玉の御統の) 「神代記」

また、詩經の押韻から之韻哈韻の同用例字のみを挙げてみたい。

之韻	「期、(思)、基、(仕)、(子)、己、(士)、(史)、(使)、里、止」 . . . o音形
哈韻	「來、殆、宰」 o音形

このような上代日本万葉仮名(太字)と中國詩經の押韻法から見られる之韻・哈韻字は、全てo音形として漢語史における上古音を傍証するもの²⁸⁾である。詩經の太字は、皆、韓國漢字音ではo音形となっており、上記例にあるような上古音oに對應するものであると考えられる。これは韓國語史に於けるo>ㅁ、o>o²⁹⁾を初め、o>a、o>o、o>əのような方言史³⁰⁾からも裏付けられる。

22) 有坂秀世(1968)『國語音韻史の研究』三省堂 p.325

23) 河野六郎(1979)『河野六郎著作集2』平凡社 p.480

24) 満田新造(1964) 前掲書 pp.626-627

25) 王力(1980) 前掲書 p.83

26) 満田新造(1964) 前掲書 p.627

27) 満田新造(1964) 前掲書 pp.624-627

28) 哈韻字は、上代特殊仮名遣いのエ列乙類の二重母音として出現するものである。

このような考え方は、有坂秀世博士、河野六郎博士の見解と異なるもの³¹⁾であるが、上記のような漢語史、韓國語（方言）史的観点、或いは、推古遺文、古事記などに見られる日本吳音 β_a 類、 β_b 類との實証的な比較検討は見過ごされたためであろう。

3-4. 微韻

微韻字は上古微部に屬し、哈韻の喉音一部字、皆韻唇音一部字、灰韻大部分字などと関わりが深い韻目である。B. Karlgren、董同龢などは、その推定音を $iə$ としているが、王力は中心母音を ə としている³²⁾。

微韻に、合口が多く、輕唇音化が起こる理由に對する説明には、 $iə$ が役に立つが、日本吳音古層音形の出現に就いては説明ができない。つまり、三等乙介母が入って $iəi$ としたら、 e のような前舌口蓋的音韻に對する説明が合理的に行われ、また、合口介母が入って $iwəi$ としたら、円唇化による中心母音の調音点後退で輕唇音化の説明にも有益であろう。 $iə$ であるとすれば、 $i\text{ə}$ 、 $i^w\text{ə}$ となって曖昧母音 ə のfront & high vowel化が行われ、合口字の存在と輕唇音化の説明を悪化すると考えられる。河野六郎博士、藤堂明保博士などは əi を採用している³³⁾。

日本吳音の古層、中層に見られる e 音形は上代特殊仮名遣いエ列乙類で、次代の中古漢音に連続する β_a 類音と明らかな異音韻を成すため、 β_b 類音と看做しても差し支えない。 β_a 類音の i 音形は中層に屬するが、時代的に β_b 類音と違わず、従って、二音韻体制の共時的實態を成したことがわかる。

平安時代以後の日本吳音字は、概ね、漢音に連続する β_a 類音に對應し、音韻史的に決して新しくないことが明らかである。

4. まとめ

止攝に於ける日本吳音字は、歴史的に次代に連続する β_a 類音と連続しない β_b 類音との二音韻体制の共時的實態を成しており、更に古層、中層、新層の重層的構造を有している。上古音は概ね、 β_b 類音の古層、中層に屬するが、日本吳音 β_a 類音も時差的に劣らず、（脂韻甲のような）韻目によって古層、中層、新層の三層に亘って出現している。これは、 β_b 類、 β_a 類が平安時代前後にして通時的に現れる蟹攝字³⁴⁾と相反する、もう一つの日本吳音の特質でもある。

このような二音韻体制（ β_a 類、 β_b 類）と重層的構造によるものが、共時的に絡み合い現れた時代が過去にあり、継いで時代的、方音的事象が加えられて平安時代以後の日本漢字音に継承されたとした

29) 李基文(1998)『國語史概説』p.210

30) 徐廷範(1990)『音韻の國語史的研究』集文堂 pp.159-212

31) 兩博士は具体的な例を挙げたことがなく、また、その理由も分明ではない。

32) 王力(1980) 前掲書 p.82

33) 河野六郎博士の「朝鮮漢字音の研究」『資料音韻表』、藤堂明保博士の『音注韻鏡校本』には əi が採用されている。

34) 沼本克明(1997) 前掲書 pp.198-204.蟹攝字分韻表には平安時代以前に β_b 類、以後に β_a 類が通時的に現れている。しかし、止攝字の β_b 類と β_a 類は共時的に現れている。

らその複雑性は見当も付かないことであろう。日本吳音に体系が無いと言う見解³⁵⁾は正にこの理由のためであろう。この点で、森博達氏の原音による日本書紀 α 群、に対する β 群は更に、本稿で述べる β_a 類と β_b 類との二音韻体制の三（重）層的構造によって説明する必要があると考えられる。

さて、問題は β_a 類と β_b 類との二音韻体制の共時的非体系性が見られる理由であるが、 β_b 類が、上代日本語の一部として言語生活を営んできたものであることは確かであろう。しかし、共時的に存在していた止攝 β_b 類が日本語音韻体系に受け入れられず、 β_a 類とは違う音韻史を辿ったことに就いては、先ず、沼本克明博士のような「外來語説」³⁶⁾を擧げることができる。

本稿で明らかになった止攝字日本吳音点に於ける二音韻体制の共時的實態から、卑見を付け加えて言うと、上代日本人の言語生活の中に³⁷⁾基層を占める β_a 類が早くから共存していたことは、 β_b 類は相對的に一部階級層（例えば、渡來人、僧侶）による文獻音、或いは、一部位相語であった可能性が高いことが言えるであろう。

日本吳音の研究諸家³⁸⁾によって度々述べられてきたこれは、止攝諸字に於ける日本吳音を通して再び確認されたわけで、更に、このことは上古以來、日本吳音に於ける受容態度と音韻構造による相違があったとはいえ、漢語を方便とした言語生活的観点では同様であったことも傍証するのではないだろうかと考えられる。

このような考え方をとると、日本吳音史は β_b 類から β_a 類への歴史となる。



35) 沼本克明(1997) 前掲書 p.213

36) 沼本克明(1997) 前掲書 p.208

37) 従って、上代日本人の基層及び、一般大衆（化）を意味するのであろう。

38) 馬淵和夫『日本韻學史の研究Ⅱ』(1984) 臨川書店 p.1071, 「漢字の訓」『言語生活』(1951) p.44, 木下礼仁「日本書紀に見える百濟史料の史的価値について」『朝鮮學報第21,22輯』(1961) 朝鮮學會 p.722

【参考文献】

- 董同龢(2002)『漢語音韻學』, 文史哲出版社, 台北 pp279-280
- 藤堂明保(1971)『音注韻鏡校本』, 木耳社, 日本東京
- 馬瀨和夫(1984)『日本韻學史の研究』, 臨川書店, 日本京都. pp.1054-1076
- 沼本克明(1997)『日本漢字音の歴史的研究』, 汲古書院 日本東京 p213
- _____(1995)『日本漢字音史論輯』, 築島裕編, 汲古書院, 日本東京. pp125-186
- _____(1986)『日本漢字音の歴史』, 東京堂出版 日本東京 pp68-80
- _____(1982)『平安鎌倉時代における日本漢字音に就いての研究』武藏野書院, 日本東京. pp.157-232
- 森博達(1981)「漢字音より觀た上代日本語の母音組織」『國語學126』, 武藏野書院, 日本東京. pp.30-42
- _____(1982)「平山久雄氏に答え再び日本書紀α群原音依據説を論証す」『國語學131』, 武藏野書院, 日本東京. pp55-66
- 滿田新造(1964)『中國音韻史研究』, 武藏野書院, 日本東京. p.631. pp.626-627
- 박창원(2000)『口訣研究6』, 口訣學會. pp.174-175
- 徐廷範(1990)『音韻の國語史的研究』, 集文堂. pp.159-212
- 有坂秀世(1955)『上代音韻攷』三省堂 日本東京 p.66, pp.719-720
- _____(1968)『國語音韻史の研究』, 三省堂, 日本東京 p.325
- 王力(1980)『漢語史稿』, 中華書局, 北京. pp.82-83
- 李基文(1998)『國語史概説』, 태학사. p.210
- 東辻保和(1971)『訓点語と訓点資料第44輯』, 訓点語學會, 日本東京
- 陳新雄(2000)『重校增訂音略証補』, 文史哲出版社 p.16, p.161
- 築島裕(1983)『大般若經音義の研究』, 勉誠社, 日本東京
- 河野六郎(1979)『河野六郎著作集2』, 平凡社, 日本東京 p.480

日本吳音は唐代中期以降の秦音体系を表しているとされている日本漢音に對して、六朝期共時的方音實態を表しているとされている古態音韻である。この日本吳音は正音である日本漢音に比して体系がないとよく言われている。しかし、どのようなところでどのような非体系を成しているのかについての考察はあまり無いようである。

本稿では日本吳音諸資料に現れる止攝字を中心として等韻學的に分析し、後代に連続するものと連続しないものとの異音韻体系を明らかにした上で、古層・中層・新層の絡み合った重層的特質の日本吳音ならではの非体系性を論じた。こういう特質は通時的に連続しない蟹攝字の音韻事象とは異なるもう一つの日本吳音の非体系性を意味するものである。

キーワード：日本吳音、日本漢音、止攝字、蟹攝字、上古音、中古音、重層性、推古朝遺文、古事記、日本書紀、万葉集

투 고 : 2004. 5. 31
1차 심사: 2004. 6. 12
2차 심사: 2004. 7. 3

住 所：대전시유성구노은동534-18, 501호
電 話：(042)476-2239
E-mail：vuv534@hanmail.net